

隠された心の力

正反対の人間観

さまざまな現象に内在する目標指向性という特性は、スイッチを押しさえすれば、あとは自動的に仕事を片づけてくれる電化製品とある意味で同質のものであるが、その裏には、内蔵された機械装置をはるかにしのぐ複雑な、しかも自律的な仕組みが潜んでいるに違いない。その機序については、これまでも、さまざまな角度から断片的に語られてきた。無意識的大脳作用、闕下自我、肉体の知恵、普遍的無意識、自然治癒力、内なる指導者、宇宙の叡智などと表現されてきたものが、その仕組みの一部に関係していることが推定される。しかしながら、この仕組み自体については、これまでほとんど検討されることのないまま放置されてきたように思われる。この場合にもやはり、心のもつ力を認めることに対する抵抗が働いているのであろうか。

本章ではまず、通常の現象のうち神童と呼ばれる特殊な子どもたちのもつ能力や催眠状態で起こる現象に見られる目標指向性を、次いで超常現象に必然的に伴う目標指向性を概観し、最後

に、その裏に潜んでいるはずの知識と能力とを推定することにしよう。

非超常的現象——神童

最初に、超常的とはされていない現象をとりあげるが、その代表として神童について検討する。それは、このような子どもたちが示す能力に目標指向性がきわ立って見られるためである。「才知のきわめてすぐれた児童」〔『広辞苑』第四版〕という神童の定義に従うと、かなり広い範囲の子どもたちが含まれることになる。つまり、(1) 早期教育も関係しているのかもしれないが、ノーバート・ウィーナー (Wiener, 1964) やウオルフガング・モーツアルト (Parony, 1993) を典型例とする、異例に早熟な能力を発揮する子どもたちばかりか、(2) 特に教育が施されたわけではないのに通常の説明が成立しにくい能力を早期に発揮する子どもたちも、その中に含まれるということである。そうすると、少なくとも第2群に属する子どもたちの場合には、何らかの超常的過程が関与している可能性が考えられるし、もしかすると第1群の一部にも、その可能性があるかもしれない。にもかかわらず、神童は、催眠と同じく通常の現象として説明できると見なされ、ごく一部の特殊な事例を除いて心霊研究の枠組みから外されてしまったのである。

十九世紀末にヘンリー・シジウィックらとともに心霊研究協会を創設したフレデリック・W・H・マイヤーズは、死後に出版された二巻からなる主著 *Human Personality and Its Survival of Bodily Death* (『人間の人格とその死後の生存』) の第三章で「天才」について考察している。その中

第1章 隠された心の力

表1-1 主な計算神童

	能力が最初に 発現した年齢	その能力が観察 された期間	知的水準
アンドレ＝マリー・アンペール	4	?	傑出している
ジョージ・パーカー・ピダー	10	終生	よい
ジェデディア・バクストン	?	?	低い
ゼラー・コルバーン	6	数年	中程度
ヨハン・ツァヒアリアス・ダーゼ	少年期	終生	きわめて悪い
トマス・フラー	少年期	?	低い
カール・フリードリヒ・ガウス	3	?	傑出している
ヴィト・マンジアメレ	10	数年	中程度?
アンリ・モンドゥー	10	数年	低い
アドリアン・プロロンゴ	6	数年	低い
トルーマン・サフォード	6	数年	よい
“ウティカのヴァン・R氏”	6	数年	中程度?
ウェイトリー（大主教）	3	数年	よい

Myers, 1903, vol. 1, p. 80より引用。ただし、原典には姓の表記しかないのので、引用に際して名をつけ加えた。常識では考えられないほどの計算能力が初めて発現したのは生後数年を経てからであり、それも長くは続かないことがわかる。

でマイヤーズは、主として特殊な計算能力を示した十三名の神童を一覧表にまとめている（表1-1）。それによると、能力が初めて観察された年齢が判明している十二例では、三歳が二例、四歳が一例、六歳が四例、十歳が三例、漠然と「少年期」とされているのが二例であった。能力の持続期間については、明らかにされている九例中、「数年」が七例、「終生」が二例である。また、知的水準については、「優れている」が二例、「良い」が三例、「中程度」および「おそらく中程度」が三例、「低い」が四例、「きわめ

て低い」が一例であつた。この中には、アンドレ・マリイ・アンペールやカール・フリードリヒ・ガウスをはじめとする著名人も含まれている。

その中でマイヤーズは、合衆国出身の心理学者、エドワード・W・スクリプチュアが一八九一年に *American Journal of Psychology* (『アメリカ心理学雑誌』) に発表したヴァイト・マンジアメレの事例を詳しく紹介している。シリイ島の羊飼いの息子として生まれたヴァイトは、一八三七年、十歳四カ月の時点で、かなりの知識を要する数学の問題を、自分でもわからない方法で解くことが出来る能力を偶然に発見され、その能力がパリのアカデミーで確かめられたという。最初に、「三七九六四二六の立方根は」という問題が出されたが、ヴァイトは三十秒ほど置いて一五六という正答を出している。続いて、「その三乗足す、その二乗掛ける五が、それ掛ける四二足す四〇になるといふ条件を満たすものは」(つまり、 $x^3 + 5x^2 - 42x - 40 = 0$) という問題が出されたが、ヴァイトは一分もしないうちに五と正答している。三番目の質問は、式で表わすと、 $x^4 - 1679 = 0$ となるものであつた。この時は、四、五分の間を置いて、少々ためらいがちに、三はまちがいかと聞いたが、誤つていることを告げられたヴァイトは、二、三分の後、正答である七を口にしたという。最後に、二八二四七五二四九の十乗根を出すよう求められたヴァイトは、短時間のうちに七と正答している。後日、この試験を担当した委員会は、ヴァイトが用いていた計算法についてにわからなかつたとする声明を発表したという。

ヴァイトの場合はもちろん「暗算」を使つていたわけであるが、通常の計算法を用いたのでは、筆算であれ暗算であれ、これほどの短時間で正答を出すことは、不可能とは言えないまでもきわ

めて困難であろう。それ以前に、十歳という年齢を考えれば、問題の意味を正確に把握すること自体が難しいはずである。

マイヤーズが、主にスクリプチュアの論文に基づいて紹介している十三例のうちでは、知的水準が「低い」事例と「きわめて低い」事例とが、合わせて五例あるわけであるが、このように、神童の中には、全体として知的能力の低い事例がかなり高率に含まれる。その種の事例としてわが国で有名なのは、「日本のゴッホ」と呼ばれた山下清であろう（戸川、一九四〇年、五五―八四ページ、Telfert, 1988, p. 564）。このように、全体的には知的能力が低いにもかかわらず、一部の能力だけが突出している事例は、昔からイデオ・サヴァン *idiot savant* として知られてきた。現在では、サヴァン症候群と呼ばれている。

合衆国の精神科医、ウイリアム・A・ホーウィッツらは、一九六〇年代半ばに、サヴァン症候群をもつ、カレンダー計算^{註1}を得意とする二十四歳の一卵性双生児について報告している。それによると、一方は今世紀のカレンダーについてしか正答できないが、六歳からその能力を発揮し始めたもう一方は、二〇〇二年二月十五日の曜日を聞かれた時も、一五九一年八月二十八日の曜日を聞かれた時も、それぞれ金曜日、水曜日と速やかに正答したという。しかし、一五八二年に

【補註1】この論文は、*American Journal of Psychology* 第四巻の巻頭を飾るもので、ヴァイトの事例 (Scripture, 1891, p. 2) は、アンペールやガウスの後に第九例として登場する。興味深いことに、その中には、売価をさまざまな国の通貨などに暗算で瞬時に換算する能力を、必要に迫られて発揮するようになった「アフリカの奴隷商人たち」(ibid., p. 3) も、第2例として含まれている。

施行されたユリウス暦からグレゴリオ暦への移行を知らなかったため、それ以前の時代については十日の誤差が生じたが、それを計算に入れれば曜日を正確に答えることができた。また、四月二十一日が日曜日になる年は、という質問に対しては、ふたりともが、一九六八年、一九五七年、一九六三年、一九四六年と正答している。ところが、このふたりは、一桁の数字の加減乗除すら満足にできなかったたのである (Horvitz et al., 1965, p. 1075)。

このふたりについては、その後、アメリカの著名な神経科医、オリヴァー・サックスが調査している(サックス、一九九二年、三二九―三六三ページ)。それによれば、ふたりの数字の記憶力は群を抜いていたという。「彼らは、過去のどの日を言われても、その日の天気とその日におこった出来事を答えることができるのである。だいたい満四歳の時からあとでさえあれば、どの日をきかれても、すぐに答えることができるのだった」(同書、三三四―三五ページ)。これは、ふつうの人間が未だ手にしえていない記憶能力および検索能力の現われであろう。

ある時、サックスの目の前で、ふたりのいるテーブルにあつたマッチ箱が床に落ち、中身が散乱してしまうという出来事があつた。

「百十一」と二人は同時にさげんだ。それからジョンが、「三十七」とつぶやいた。マイケルもおなじことを言った。ジョンがもう一度おなじことを言った。それで終わりだつた。私がマッチの軸をかざえると——時間がだいぶかかつたが——ほんとに百十一本あつた。

「どうしてそんなに早くかざえられるの？」私はたずねた。「かざえるんじゃないですよ」

と二人は言った。「百十一が見えたんです」〔中略〕

「なぜ三十七とつぶやいたの？ なぜそれを三回くり返したの？」と私は二人にたずねた。彼らはそろって同時に言った。「三十七、三十七、三十七で百十一」〔サックス、一九九二年三三七

—八ページ。傍点、原著者）

ふたりは、ESPによってマッチ棒の数を知ったのであろうか。自閉症の研究で有名なバーナード・リムランドは、自閉症的サヴァンにはESP能力をもつ者が一部にあると述べている（Rimland, 1978, p. 49）が、シドニー大学心理学科のT・マクマレン（McMullen, 1991）は、リムランドの掲げた事例を検討し、それらについてはESP以外の説明が可能であることを指摘している。リムランドの事例にESPが関与していなかったとしても、自閉症児やサヴァン一般のESPが否定されるわけではないが、いずれにしてもこの双生児は、なぜ散らばったマッチ棒を一瞬（あるいは、短時間）のうちに正しく数えることができたのであろうか。

サックスは、この双生児について、さらに驚くべき観察をしている。長いが、重要なのでそのまま引用する。

二度目にこの二人を見たとき、彼らは一緒に部屋の片隅にすわっていた。二人の顔には、謎のような微笑がかんでいた。〔中略〕彼らは二人だけで、数そのものに関係したふしぎな対話をやっているらしかった。ジョンがある数を言う。六桁の数だった。マイケルはそれ